

支え合いマップ学習用

寸劇シナリオ

<1>

住民流福祉総合研究所（木原孝久）

350-0451 埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷1476-1

電話 049-294-8284

ホームページ <http://juminryu.web.fc2.com/>

1.寸劇の実施法

支え合いマップとはどういうものなのかがよくわかる方法はないものか、いろいろ考えてきたのですが、その一つとして寸劇のシナリオを作成してみました。これをマップセミナーの中で、主催者や受講者が一緒になって即席で演じてみたらどうか。そしてその後どんなことを学んだらいいのかも、本冊子の中に入っています。

(1)準備作業

拡大コピーで大型のマップを用意するには特殊なコピー機が必要なので（白地図は最終頁にあります）、ホワイトボードに手書きする方法でも行えます。すべての家を書く必要はないので、まず道路だけをあらかじめ書いておき、あとは寸劇の中で聴取結果を記入していく際、関係する家だけを記入しながら進めていくのです。

当日の参加者の選定は、その場でセミナー参加者の中から指名するのもいいし、重要な部分は主催者が受け持てばいいでしょう。

必要な出演者は7名です。聴取担当者1名と、住民が5名、そして記入担当者1名。聴取者と記入担当者は主催者が担当して下さい。

(2)寸劇の進行

受講者にもシナリオを配布し、参加者もシナリオを読みながら行います。スピードで気を付けるべき点は、記入担当者のペースに合わせることです。

5名の住民が発言する際は、ただセリフを語るのではなく、まず「田中です」というように名前を言って下さい。そうしないとだれが語っているのかが分かりません。

記入担当者は、あらかじめシナリオに載っているマップをよく見て、どういうことが書かれているかを確認し、この通りになるように記入して下さい。

(3)寸劇後の解説

この寸劇の最大の目的は、マップをどう作るのかを理解してもらうことですが、その次に大事なのが、マップ作成後にどのように取り組み課題を抽出するかという点です。その方法がこの冊子に書かれているので、これに沿って解説して下さい。ポイントは二つあり、一つは「各層への振り分け」、もう一つは「一般化」です。それらの意味をしっかりと理解した上で解説を行う必要があります。

2.寸劇のシナリオ

以下がシナリオです。この中の「聴」が聴取を担当する人。その他がマップづくりに参加してくれた人です。



聴取者 ここは60世帯ですから、マップを作るにはちょうどいい範囲ですね。まず皆さんのお住まいを教えてください。赤で印をつけましょう。

田中 私の家はここ。

聴 ずいぶん大きいお家ですね。

田中 以前に食堂をやっていたもので。調理設備などもまだ残ってるんです。

中村 私はここ。

宮崎 私はここ。

出口 私はここ。

井上 私はここ。

聴 ご近所に満遍なく分布していますね。大変好都合です。

聴 まず、気になる人を調べましょう。気になると言えば、一人暮らしの高齢者は？

田中 ここの内田さんが男性の一人暮らしです。

聴 誰かこの方を見守っていますか？

田中 家からよく見えるので、気にかけています。

聴 食事はどうしていますか。

田中 コンビニに弁当を買いに行っているようです。私も時々おかずを届けています。

聴 食堂をされていたということで、さすがですね。他に一人暮らしの方は？

中村 私の家の前の戸田さんも一人暮らしの女性です。85歳ぐらいなので心配です。

聴 食事はどうしていますか？

中村 自分で作っているようですが、私も時々おかずをおすそわけしています。

聴 この方、ほかに不便なことはありますか？

中村 この辺りにスーパーがないので、買い物に不便をしているようです。

聴 誰かついでに乗せてあげられる人はいませんか？

中村 夫が昔タクシーの運転手をしていたので、時間が空いている時は乗せてあげています。

聴 それは有難いですね。車がなくて困っている要援護者は他にもいると思うのですが、ご主人の他に、車に乗せてくれそうな人はご近所にいませんか？

中村 夫に聞いてみますが、いると思いますよ。

聴 他に一人暮らしで心配な方は？

宮崎 一番心配なのは鈴木さんという女性。最近認知症になって、毎日徘徊をしています。

聴 どのあたりを徘徊していますか？

宮崎 ルートはほぼ決まっています。（と言って徘徊ルートを線で引く）

聴 誰かが見守っていませんか？

田中 私の家の前を通る時は気を付けて見るようにしています。

宮崎 鈴木さんが出かける時や帰ってくる時などに、よく見えています。

聴 そういえば今日参加していただいた5名のうち4名は、この徘徊ルート沿

いにお住まいですね。

全員 (うなづく)

聴 鈴木さんを日常的に見守っている方々でケア会議を開くといいですね。

聴 彼女は食事は作れていますか？

宮崎 なんとか自分で作っています。私も時々おすそわけをしています。

聴 近隣の高齢者におすそわけをしている方が3人もいますね。しかも田中さんのお宅は以前に食堂で、調理設備もそろっているということですので、皆さんで協力して、時々一人暮らしの方や認知症の鈴木さんを招いて食事会を開けたらいいですね。(宮崎と中村と田中、うなづく)

聴 鈴木さんは何か楽しみ事はないのですか？

宮崎 玄関に、自分で描いたという油絵が飾ってあります。部屋の壁にもたくさん掛けてあるようですよ。昔はこれが趣味だったんでしょうね。

聴 それを何とか活かしてあげましょうよ。近くに空き家でもあれば、そこを常設展示場にしてね。

宮崎 彼女の自宅の裏に空き家があります。

聴 家主にかけあってみたらどうでしょう。ほかに一人暮らしで気になる人は？

井上 近くの後藤さんが、奥さんに亡くなられてから引きこもっていて、挨拶もしてくれません。

聴 この方は何か趣味を持っていませんか？

井上 特別ないようですよ。

出口 ああ、そういえば夫が釣りをしますが、以前は後藤さんも一緒に行っていましたよ。今、思い出しました。

聴 もう一度誘ってみたらどうでしょうか？

出口 夫に言ってみます。

聴 このご近所で老人ホームに入所した人はいますか？

出口 近くの山本さんのお母様が入所しました。

聴 里帰りはしていませんか？

出口 家族が嫌がっているみたいですよ。「一度帰ると癖になる」なんて言っていましたから。

聴 それなら、田中さんのお宅で食事会を開く時に招待したらどうでしょうか。知り合いの家に里帰りというケースもあるんですよ。

田中 私はいいですよ。

聴 ここまでで、いくつかの取り組み課題が出てきたので、皆さんの手で一つひとつ取り組んでみたらどうでしょう。今日参加して下さった皆さんが、この地区の世話焼きさんとお見受けしました。この5名でご近所福祉推進チームを作ってみませんか？

3. 取り組み課題の抽出

聴取の中から7つの課題が出てきた。その課題一つひとつについて、「解決のヒント」「解決策」「各層への振り分け」「聴取のポイント」の4点を解説してある。

■＜解決のヒント＞とは、その課題を解決するためのヒントとなるものが、聴取の中で見つかったか、ということ。このヒントを聴取の場で、住民から聞き出すのが、聴取者の腕の振るいのようなのだ。そのヒントが見つければ解決策は自然に出てくる。

■＜各層への振り分け＞は、取り組み課題をご近所か自治区か校区か市町のいずれが担うべきかを述べてある。この作業がうまくいけば、マップを作ることでそれぞれの層の役割が見つかるのだから、それに組み組めば、まさに地域ぐるみの取り組みになる。

■＜（解決策を考えるための）聴取のポイント＞は、こちらがめざすような解決策を導き出すためには、聴取の場でどのような工夫が必要かを指摘してある。

[課題①]

一人暮らしの高齢者が数名、買い物に不便をしている。

＜解決のヒント＞

中村さんの夫が元タクシー運転手で、ときどきご近所内の人を送迎している。他にもご近所で送迎ができる人がいるらしい。

＜解決策＞

中村さんのご主人を中心にご近所で送迎サービスチームづくり。

＜各層に振り分け＞

中村さん以外に送迎をしている人を掘り起し、チームを作るまでの手伝いをするのは自治区（自治会など）。事故対応や送迎関連の活動事例の提示などは校区（地区社協）や市町村（社会福祉協議会またはそのボランティアセンター）の役割。

＜（解決策を考えるための）聴取のポイント＞

このご近所の住民に、「隣人を送迎する」という慣行があるかどうかを聞き出すのが重要ポイント。「ほかにもご近所で送迎ができる人がいるらしい」ということを聞き出したから、送迎チームの可能性は強まるのだ。

[課題②]

一人暮らしの高齢者はまた、食事に不便している。コンビニ弁当で間に合わせている人も。

<解決のヒント>

隣人におすそ分けをしている人が3人もいる。また田中さんは元食堂を開いていたから、調理設備も場所もある。

<解決策>

田中さん宅で、一人暮らし高齢者等を招いて食事会を開く。毎日徘徊している認知症の鈴木さんも、食堂がそのルートにあるので、食事会に招く。

<各層に振り分け>

会食会の準備から開催までの支援は自治区。会食グループや栄養士、調理設備の調達などは校区で、食品衛生法対策など行政との折衝は市町村。

<聴取のポイント>

食事に関する住民の資源をまず探ること。その結果次第で、対策を考える。ここでは、たまたま元食堂があり、当主に食事サービスの意欲があり、しかもおすそ分けをしている人が3人見つかったので、食事会の開催という案が出てきた。

[課題③]

毎日徘徊をしている認知症の鈴木さんが心配。

<解決のヒント>

幸い徘徊ルートがご近所内に限られており、しかもマップづくり参加者のうち4人が彼女の徘徊ルート沿いに住んでいて、それぞれが接点で日常的に見守っていた。しかもこの人たちは世話焼きさんだった。

<解決策>

認知症の鈴木さんを見守っている4人でケア会議を開く。と言っても、意図的に「会議」を開くのではなく、たまたま出会った者同士で情報交換をする、といった程度でいい。

<各層に振り分け>

徘徊が隣接のご近所にまで広がった場合は、隣接ご近所や自治会との折衝は自治

会。認知症を隠さないまちづくりへ広げての活動は校区。この際、認知症サポーター研修をするのなら市町の役割。「会議」にケアマネジャー等を参加させるのは校区か市町の役割。

<聴取のポイント>

徘徊ルートでだれが見守っているかを探っていたら、偶然、マップづくりに参加した人の多くが接点で見守っていることがわかった。ならばこの4人を生かそうということになる。

[課題④]

認知症の鈴木さんに何かお楽しみはないのか。聞いてみたら、以前に油絵を描いていたらしく、玄関などに作品が飾ってある。これを生かせないものか。

<解決のヒント>

鈴木さんの自宅の近くに空き家がある。これを使えないか。

<解決策>

空き家を改修して、鈴木さんの作品の常設展を開く。または常設展示場にする。

<各層に振り分け>

自治区は開催に協力。会場を確保するための交渉も自治区。この事業関連の人材確保（画家や美術館関係者）は校区または市町。

<聴取のポイント>

認知症の人について、本人の趣味活動まで聞こうとする人はあまりいない。しかし福祉がめざすのは何も「安全」や「困り事の解決」だけではない。厚労省も言っているように、「どんなに要介護でも、住み慣れた地域でその人らしく生きていけるように」支援することも、福祉はめざしているのだ。

[課題⑤]

後藤さんが奥さんに亡くなられた後、家に引きこもっていて、挨拶もしてくれないという。

<解決のヒント>

出口さんの夫が釣りをしているが、以前後藤さんも一緒に行っていた。

<解決策>

出口さんの夫が、また誘って見たらどうか。

<各層に振り分け>

後藤さんのご近所との接点をもっと掘り起こすのはご近所と自治区の協働で。釣り関連のグループの発掘や、協力を求めるのは自治区や校区。

<聴取のポイント>

引きこもりの人も、丁寧に聞いていけば、一人か二人、「この人なら」と本人が見込んだ人が見つかるものである。その多くは、本人の趣味活動の仲間である場合が多い。引きこもりの人も、何かにこだわりを持っているとみていい。そのこだわりの対象が趣味なのである。

[課題⑥]

山本さんのお母さんが老人ホームに入所した。ときどきでもいいから、里帰りをさせられないか。家族は嫌がっているというが…

<解決のヒント>

田中さん宅で食事会が開かれたら、これを生かせないか。自宅でなく、知人宅やサロンの会場に里帰りというケースもある。

<解決策>

田中さんも「いいですよ」と言っているので、山本さんの里帰りに合わせて食事会を開くという方法もある。

<各層に振り分け>

施設との交渉は自治区か校区。そこで移送や介助職員の派遣依頼も。校区や市町は、里帰りをしやすい環境づくりを施設関係者と。

<聴取のポイント>

施設に入所すると「一件落着」と考えてしまうが、本人は家に帰りたがっているはずである。福祉は当人の側から考えないと、本当の解決策は出てこない。家に戻れないとしても、せめて里帰りぐらいは実現させる必要がある。

[課題⑦]

これらの課題にご近所の誰が中心になって取り組むのか。この際ご近所福祉推進組織を立ち上げる必要がある。

<解決のヒント>

マップづくりに参加してくれた5人は、既におすそ分けをするなどで、福祉活動をしている。事実上の世話焼きさんだ。

<解決策>

ならばこの人たちでとりあえず推進チームを作ってみたらどうか。

<各層に振り分け>

自治区が音頭を取って推進チーム作り。

<聴取のポイント>

ご近所福祉推進を担える人をどうやって探すか。意外に効果的なのが、マップづくりの場で資質を測ることだ。だからマップ作りに参加してもらう人を決める時は、リーダーを探すというぐらいの意気込みで行うと、人材の発掘にもつながる可能性がある。

4. 「振り分け」と「一般化」

一つのご近所でマップづくりをした結果、複数の取り組み課題が出てくる。その課題の取り扱い方次第では、地域福祉へつなげることもできる。キーワードは、「振り分け」と「一般化」だ。

① 「一般化」— どのご近所でも使えるノウハウに加工

1つのご近所から出てきた取り組み課題の多くは、じつは他のご近所にも適用できる。つまりご近所から出てきた課題をどのご近所でも使えるようなノウハウにして生かしていけばいいのである。これを「一般化」と言っている。

1つのご近所で一般化できるテーマが7つ出てくるとすると、10のご近所でマップを作れば、合計70個の事業企画が出てくる勘定になる。これだけで地域福祉の推進計画ができてしまうぐらいなのだ。

② 「振り分け」— 取り組み課題を各層に分配

もちろんご近所さんだけで地域福祉ができるわけではない。一つの企画を実行するには、各層が応分の役割を果たす必要がある。マップづくりの場に、各層（第1層、第2層、第3層）の関係者が揃っていれば、各自自分たちの担う部分を持ち帰

ればいい。「振り分け」と言っている。それぞれの層が担うべき基本的な役割を整理してみる。

①第4層（ご近所）が活動の主役。

ご近所が担う部分は最も多く、活動のかなりの部分をここで担ってもらおう。ただしご近所で担えるようなやり方にする。私共は「住民流」と言っている。

②第3層（自治区）はご近所への強力な後押し役

第3層の役割は、ご近所に次いで多く、実質的には最もハードだ。ご近所の人たちは、ご近所福祉を自分たちで主体的に担うという考え方がまだわが国にはないので、しぜん腰が引けている。そこで自治区の民生委員や自治会の福祉部あたりの人たちが、強力に後押しする必要があるのだ。

今は自治会の福祉部などは、自治区としてサロンを開いたり、見守り活動をしているが、そのやり方を変えてもらう必要がある。それを自治区でやってしまうと、ご近所さんが手を引いてしまうからだ。だから自治区はなるべくやらずに、その分ご近所で取り組んでもらうようにする。と共に、自治区で活躍している人たちも、自分のご近所に戻って、そこで腕を振るっていただきたい。

③第2層（校区）は「マニュアル化」という頭脳労働

第2層に推進組織を置いている地域とそうでない地域がある。そこでここでは第1層（市町村）と一体として考えていく。この層の役割は、今まで考えられてきたものとは全く異なり、かなり頭脳労働の部分が増えてくる。

この圏域でないと得られない資源が必ずあって、その場合にも出番はあるのだが、それ以上に、「一般化」する場合に、どうしても活動・事業をマニュアル化しなければならない。マニュアル化することで、特定のご近所で実施されている事業を他のご近所や他の自治区、他の校区にまで広げることができるのだ。

5.寸劇を通したマップづくりの解説法

寸劇が終わったら、その結果をもとに、マップづくりの要諦を参加者に伝える必要がある。その時どんな解説が必要なのかを、以下に並べてみた。

(1)マップづくりの範囲

まず支え合いマップづくりをするために適した範囲であるかを確認する。ここは60世帯で、50～80世帯の適正規模に入るから、好都合だと言える。

(2)マップづくりの参加者

次いでマップづくりの参加者の確認。60世帯から5人が集まったから適性と言える。またこの5人がご近所の各所から満遍なく集まっているので、これも適正と言える。

参加してもらった5人が聴取を受けるのに適した人材であるかも確認する必要がある。ここでは5人ともこのご近所の世話焼きさんらしいので、これはとても都合がいい。ご近所のことをよく知っているだろうし、自身、要援護者に関わっている可能性も大きく、ご近所の関わり合いの情報がそれだけ出てくるからだ。

(3)気になる人の気になることを聴き出す。

次はマップづくりの主目的である、要援護者の抽出である。その人物について、どういう「気になること」があるかを聞き出したうえで、それに誰がどのように関わっているかを調べる。①本人はどのような解決努力をしているか。②周りの人はどういう関わりをしているか。そして③その問題解決につながりそうなご近所の人々の活動など。この3点を洗い出す。

一人暮らし高齢者の場合、食事の問題が出てきた。①コンビニ弁当を買っているとか、何とか自分で作っているというが、まだ不十分だという感じだ。②隣人でおすそ分けをしている人が3人見つかった。③元食堂で、調理設備がまだ残っている家も見つかった。活動をする意欲もありそうだ。

(4)問題の解決策を提示する。

上記3点の事実を踏まえて、解決策を参加者に提示する。元食堂の田中さん宅で食事会ができないかと。これに田中さんが前向きに反応した。

(5)個々の解決策をさらに発展させる。

一人暮らしの内田さんの問題だけでなく、ご近所内の他の人たちの食事の問題も併せて解決できないか考える。そして徘徊をしている認知症の鈴木さんも食事会に呼べないか、施設に入所した人の里帰りをこの食事会で実現できないかと、話を発展させられればもったいいい。

(6)一人の問題をご近所の共通課題として捉える。

車のない一人暮らし高齢者の問題を、ただ一人の問題ではなく、ご近所共通の問題と捉えて、幅広い解決策も模索する。

買い物に不便をしている戸田さんのことから、まず②中村さんの夫が元タクシー運転手で、しかも時々、戸田さんを車に乗せてあげているという事実を引き出した。そこから発展して、他にも移送をしてくれそうな人がいるかを確認し、「いると思いますよ」という答えを引き出した。

(7)できるだけご近所内での解決を目指す。

解決策を探る場合、可能な限りご近所内の問題はご近所内の人材で解決されるように導いていく必要がある。そうしないと、ご近所の助け合いは深まらないのだ。だから食事の問題にしても、移動の問題にしても、ご近所内の福祉資源の発掘にこだわっているのである。

(8)福祉資源の見つけ方に工夫を

引きこもりの人に誰が関わっているか、といった問題では、こちらが解決策のヒントを提示しないとなかなか出てこない。後藤さんの場合も、「以前に何かやっていますでしたか？」と聞いたら、しばらく考えた末に「うちの夫が釣りをしていて、以前後藤さんも一緒に行った」と思い出した。認知症の鈴木さんの場合、「徘徊の接点で誰かが見守っていないか？」と尋ねたら、三人が見つかった、という具合である。

(9)本格的な問題解決まで引っ張る。

鈴木さんの場合、近所の人が見守ってくれていることはわかったが、それだけでは不十分である。そこで、彼女を見守っている世話焼きさんが4人もいたの

で、この4人でケア会議はできないかと提案した。

(10)本人の「その人らしい生き方」の支援まで。

鈴木さんの問題で、「以前に何かしていなかったか？」という質問をぶついたら、「油絵が家に飾ってある」という観察結果を引き出した。住民の場合、福祉課題と言えば安全と困り事の解決がほとんどで、その人らしい生き方までをも応援しようという話は出にくい。そこで聴取者が、本来はそこまで応援しなければならないのだということを参加者に説得する必要がある。この寸劇では、簡単に「油絵」の話を引き出したが、普通はここまで引き出すのに難航することが多い。

「その人らしい」といえば、施設に入所した人も、里帰りがしたいはずだという話を出している。施設の中の生活だけで満足しているはずはないのだ。ところが家族が反対しているという。ならばと、「食事会への里帰り」というアイデアを提示した。

(11)ご近所福祉推進チーム作りの提案まで。

今回の場合、参加してくれた5人がいずれも世話焼きさんだし、ご近所に満遍なく分布しているので、この人たちでご近所福祉を推進してもらおうという話を持ち出した。その人たちで、今回出てきた課題に取り組んでもらおうと提示するのだ。

(12)各層への振り分けと「一般化」

最後がこの2つの課題への取り組みである。出てきた取り組み課題を、それに取り組むのがふさわしい層（圏域）に振り分けることと、取り組み課題をどのご近所でも取り組めるように一般化する作業。聴取の段階でそこまでしなくてもいいが、聴取の後にそういう作業が残っていることを、参加者に伝える必要はある。

